

松波むかし語り ここに住み続けて その14

今回のお客様

3丁目区長、またの名を夏祭りの立て役者

志太 稔さん 81歳 3丁目

“町会とのつきあいは、昭和27年、町会をつくろうという発起人会に名を連ねてからずっとです”

—夏祭りばかりでなく、戦前から戦後にかけての松波の移り変わりや町会の活動をよく見てこられた生き字引ですね。



3丁目の区長、というより、町内の夏祭りはこの人なくては幕が開かないほどの生き字引が志太さんです。志太さんは昭和3年生まれの81歳、松波に越してきて早や65年になります。津田沼の旧国鉄の電車区に、“電機屋”として勤めて43年、56歳で退職しました。

志太さんは千葉公園の向こう側、椿森で生まれ院内小学校へ通いました。その頃は、小学校から千葉刑務所の塀が見えたといいますから、まだ東千葉駅の東側は田んぼばかりの時分でした。松波には戦時中の昭和19年に越してきましたが、当時の千葉の町は千葉公園の弁天社までで、弁天町から松波町にかけては小松山の広がるでこぼこな土地だったそうです。「戦争の前後のことだから、促成で自然の地形そのままに道路を引いたんでしょう。それで松波の道路は、いまでもでこぼこなんですよ」。「松波公民館の前の通りは、割合平らでしょ。あれは、登戸から作草部へ抜ける古い細道としてすでにあっただからです」。戦争中はいまの葛飾石油と越後屋酒店のあたりに「250キロ爆弾」が落ちて、池のような大穴が空いたことを覚えていますし、松波郵便局の前の通り、



当時の忠霊塔（志太さん撮影）

セブンイレブンの西側に道路が避けた大きな松の木がいまも1本だけ残っているのは「松波のシンボル」だと言います。松波の成り立ちについてもよくご存知です。

「戦争も終わって落ち着いた頃、昭和27年から松波町にも町会をつくろうという話が持ち上がって」、発起人に名を連ねたという人。いわば、町会の生みの親の一人です。志太さんらの苦勞が実って、昭和31年に町会が産声を上げました。それから一貫して、町会のいろいろな取り組みに志太さんの姿が見られます。



公民館地鎮祭 後方右端が志太さん

「次はオバキュー音頭をかけます」—盆踊りの音楽を一手に引き受けていた志太さんのお母さん、ゆきさんのおもかげを覚えておいでの方も多いでしょう。親子二代で町会の活動に走り回ってきました。御神輿の組み立てにかけては生き字引と言われる志太さん、「そうした技術は若い人たちに受け継いでゆかないと」と、と意気込みを語ります。志太さんは、当時の青年団が舞台を造って「素人演芸会」を開いたり、子どもたちに銭湯の無料入浴券を配った、にぎやかだったあの頃のお祭りが、いまでも昨日のこのように覚えているそうです。今年も、まもなく夏祭りの季節がやってきます。